1707年宝永地震と大坂の被害数

矢田　俊文

1. はじめに

本稿の目的は，宝永地震による大坂の被害数を明らかにすることである．宝永4年（1707）10月4日に南海トラフ周辺で起こった地震は宝永地震とよばれ，東海地方から九州太平洋沿岸地域を中心に大きな被害を与えた．津波は大阪湾にも押し寄せ，低地に広がる大坂（現在の大阪市の中心地域）は大きな被害を被った．検討の対象とする大坂の人口は，元禄12年（1699）時点で35万1708人と推定されている．

宝永地震による大坂の被害数を確実な史料を用いて論じている論文はほとんどない．確実な史料のみで宝永地震による大坂の被害を推定した研究には，西山昭仁氏ほかによる「宝永地震（1707）における大坂での地震被害とその地理的要因」[1] がある．しかし西山ほか論文を含め，これまでの大坂三郷の被害数について言及した論文は，幕府への被害報告書等を検討して被害数を求めたものではない．そこで本稿では，さまざまな幕府への被害報告の文書を検討することによって，宝永地震による大坂三郷の被害数を確定する．

2. 被害直後の被害情報

信頼できる史料である尾張藩士朝日重章の日記「鸚鵡籠中記」と幕府への被害報告書を記した「楽只堂年録」によれば，地震の翌日の10月5日に把握された大坂町中の被害数は，建物被害（崩家・納屋・土蔵）約900軒，死人約260人，橋の被害（破損・落橋）約35，6カ所であった．

以上の被害数は地震直後に把握されたものであり，10月5日よりも後の被害報告書によって被害数を把握する必要がある．尾張藩士天野信景が書いた随筆「塩尻」巻二十四（史料1）によると，被害数は棟数（家数）603軒，竈数（世帯数）10,100軒，圧死者3,620人，溺死者12,000人余，落橋22カ所となる．

「鸚鵡籠中記」には10月5日よりも後の被害報告書（史料2）が記されている．史料2には，「今月十日迄之書上也」とある．史料2によると，大坂の被害は，竈数（世帯数）16,000軒余，圧死者3,630人，溺死者12,100人余，落橋26カ所であった．この数字は史料1の竈数10,100軒，圧死者3,620人，溺死者12,000人余，落橋22カ所に近似している．圧死者，溺死者の数はほぼ同じである．史料2の大坂の被害報告書は幕府経由の情報と考えてよかろう．さらに，10月10日迄とあり，6日後の報告書であることがわかる．被害数は10月5日に把握された大坂町中の被害数では，建物被害（崩家・納屋・土蔵）約900軒，死人約260人，橋の被害（破損・落橋）約35，6カ所となっていたものが，史料2（10月10日迄）では竈数16,000軒余，圧死者3,630人，溺死者12,100人余，落橋26カ所となっていて，数字が大幅に増えている．落橋の箇所は減っているものの，死者数は圧死者約260人から圧死者3,630人，溺死者12,100人余へと，実に約60倍も増えている．史料2には，竈数（世帯数）も記載され，死者は圧死者と溺死者に区別されて書き上げられ，記載が詳細になっている．これは5日間の被害調査の結果，詳細な情報が把握された結果と考えられる．

3. 宝永地震の大坂の被害者数

尾張藩士が記録した宝永地震の大坂の被害記録には，堀貞儀が記した『朝林』（史料3）がある．史料3には，「右十月十日迄，公儀御帳面之写のよし」とあることから，幕府への被害報告書を写したものと思われる．さらに被害報告は10月10日迄のものであることがわかる．史料から大坂の被害は，竈数3,537，軒数（町役・役家）653軒，圧死者5,351人，溺死人16,371人であったことがわかる．

史料3の被害数と先にみた史料2の被害数を比べると，史料2が竈数16,000軒余，圧死者3,630人，溺死者12,100人余であるのに対し，史料3は，竈数3,537，圧死者5,351人，溺死人16,371人であった．竈数があまりに違い過ぎることについては理解できないが，圧死者・溺死者については極端な違いがなく，いずれも史料3の方が多い．史料2・史料3はともに，幕府が把握した良質の情報と考えられる．そう考えると圧死者・溺死者の数の違いは把握した日の違いと考えるのがよいと思われる．

このような理解は，史料2に「十日の評定には二万人の余と云々」と記され，今月10日までの書上げによる被害数を列挙しながらも，10日の評定で死者2万人と報告があったと記していることから，史料2より史料3の方が後日に把握した被害数であると考えられる．

以上のことから，宝永4年（1707）10月4日に南海トラフ周辺で起った宝永地震による大坂三郷の被害は，竈数3,537，軒数653軒，圧死者5,351人，溺死人16,371人以上であったとすることができる．

参考文献

1）『京都歴史災害研究』10号，2009年

［付記］本稿は，矢田俊文「1707年宝永地震と大坂の被害数」『災害・復興と資料』2号，2013年を再編集したものである．詳しくは論文をご覧いただきたい．